05 - 16

というのもあります。

いずれも、あることがあるのは、その一瞬だけであって、それを「想定内」とか「予想外」とかの言葉でまとめようとする人間の愚かさを教えてくれているように思います。

写真では、「シャッターチャンス」「決定的瞬間」ということがあります。逃したときにそれを「悔やんだり」、他人がそれをとらまえたときに自分も真似したり、自分がとらまえたときに、次回また再現しようと試みる、すべては、虚しいのです。ブレッソンの、キャパの、植田正治の、あの決定的瞬間は、永遠にあれしかないのです。

2006年の冬、ベネチアの雨に濡れた路地裏に、タバコを手にしたシェフが画面左端からこちらを見て、までは「想定内」でしたが、向こうを人が横切って、路上にハトが舞い降りて、までは「予想外」で、しかもこんなに「ブレて写る」のも「予想外」でした。でも、ボクにとっては今回のベネチア旅行一番の収穫であったと思っていますし、次回同じ場所に行っても、「そこには、ただ風が吹いているだけ…♪」と思います。

映画の終わり方 05 - 17

05-11で最近の映画にインターミッション（幕間休憩）がなくなってさびしいということを書きましたが、今回は、映画の終わり方について。

画面に“THE END”とか“fin”とか“完”とかの字がフェードインしたり飛び出してきたりして、ふつうは主題曲が流れるのですが、昔の映画はクオリティの低い音響効果のせいでか、あるいはフイルム送りメカニズムの不具合のためか、音楽が妙に消え入るように揺れていて、独特の雰囲気を出していました。それがまた好きで好きで。

それと、終わったかなと席を立ちあがりかけた頃に、
「30年後、2002年の寒いクリスマスの朝、ニュージャージーの海岸に溺死体が流れ着いた。NKというイニシャルが入った頸飾りが光っていたという。」
なんて文字が、画面下から盛り上がってくると、もうダメ、涙がドドッと流れ出て、劇場に明かりが灯るのが恥ずかしくて。（最後の「という」がまたメチャせつなくて）

それと、最近では、なぜか、製作スタッフの名前がとめどもなく盛り上がってくるときに、Yohko Tekeuchi とかの日本人名を探し出して、どういういきさつでハリウッドでこのYohkoさんが活躍するようになったのだろうか、などと夢想するのです。